

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

最終報告提出日:2012年9月19日

氏名:柳沢 史明

旧所属先:人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学研究室

派遣形態:平成22年度 冬学期 個人派遣 (PD)

研究課題名:「アール・ネーグル」の創出と変容:フランスと植民地地域とのはざまに

#### 派遣先での活動

##### (1) 派遣先の基本情報

国名:フランス

都市名:パリ

研究機関名:人文社会研究館(Maison des Sciences de l'Homme)

##### (2) 派遣期間

出発日:2011年9月12日

帰国日:2012年9月1日

総日数:354日

#### 主な研究成果

##### (1) 当初の計画の概要

派遣者は、20世紀前半のフランス文化圏におけるアフリカ彫刻の「発見」と受容をめぐる分析、及び同時代の黒人文化運動内部への波及効果を、テキスト分析を通じて辿る文化史研究を行ってきた。当プログラムを通じて、当時の社会的・文化的背景に関する資料群、例えば『アフリカ通信』(*La Dépêche africaine*)など30年代以降のネグリチュード運動を準備した黒人知識人らによる新聞雑誌類、フランス植民地行政にまつわる諸問題を扱った植民地省発行の官報や報告書等(ex. *Bulletin de l'enseignement de l'Afrique française occidentale*)など、とりわけ日本で参照することが難しいものを渉猟すると同時に、専門の近い現地の研究者と意見交換をすることを目的とした。

##### (2) 実際に達成された成果

資料の渉猟にあたって、主にパリの国立図書館、ケブランリー美術館の図書館を利用し、日本では閲覧が困難ないし不可能な資料を無数閲覧することができた。国立図書館では1910年台から30年台にかけてアフリカ彫刻の芸術としての価値を強調した日刊紙『コメディア』や美術雑誌『パリの美術』の記事を時代順に丹念に読み解くことができた。また、パリのオランジュリー美術館の図書館に保管されている美術商P. ギヨームの資料を閲覧することができたことも、同人物に関する記事を探している報告者にとって有意義な経験となった。

他方で、『アフリカ通信』に関しては、国立図書館にも欠落した号が数多く見つかったため、エクサンプロバンスにあるフランス海外県古文書館に赴いた。古文書館では、マイクロフィルムでは判読不可能な箇所等が存在したため古文書系の協力のもと、現物を閲覧する機会に恵まれた。とりわけ、同新聞の寄稿者の一人であるP. バイイ＝サルツマンが執筆した1928年第一号の複数の記事に関しては、フランス領植民地出身の知識人による最初期のアフリカ彫刻論として重要であり、数年後に発刊される雑誌『黒人世界』に繋がる思想的基盤として着目されべきものであろう。

フランス植民地行政とアフリカ芸術との関係については、植民地行政官G. アルディに焦点を当て、国立図書館及びケブランリー美術館の図書館にてアルディの論文及び著書を渉猟した。先行研究が少ないため、資料収集は難航したが、『仏領西アフリカ教育報』や『海外県』といった当時の官報・雑誌だけでなく、植民地地域の学校教員向けに書かれた『デッサン論』を参照できたことはアルディの植民地教育論を考察する上で重要な契機となった。アルディに関する研究方針及び報告者が提出予定の博士論文に関しては、フランス国立科学研究センターの研究員B. ドゥレトワル氏に直接相談することができた。同氏はその後もメールを通じ様々な研究者を紹介していただいた。ケブランリー美術館の研究員であるS. フリュール＝サルガ女史

もその一人で、とりわけネグリチュード前史に関して直接相談する機会を得た。なお、アルディに焦点を当てたフランス植民地行政とアフリカ芸術に関する論文は来年春に発表予定である。

パリでの研究を進めるにつれて浮上してきた研究対象として、マリ出身の画家 K. シディベの絵画及び足跡が挙げられる。1929 年パリでの個展を成功させた後、西欧各地の画廊で展覧会が開催された同画家に関しては先行研究は皆無であり、パリで研究者らに相談したものの芳しい情報を得るができたとはいえなかった。彼の個展開催に際して発刊されたと思しきカタログを探すため、パリの数多くの図書館、古文書館を当たり図書館員等に相談したが、見つけることができなかったのも今後の課題といえよう。しかし、個展の開催された時期やシディベの死去した時期の『パリ・ミディ』や『コメディア』等の日刊紙の記事を丹念に探すことで、かなりの程度、彼の作品や足跡に関する記事を探すことができたのは、長期海外派遣の強みであったと言えよう。

### (3) 今後の研究展望

今回の調査をもとに、P. バイイ＝サルツマンを中心とした、ネグリチュード前史における黒人知識人らのアフリカ芸術観を分析した成果を学会または論文として発表するつもりである。この研究は、20 年台前半のアメリカにおけるハーレムルネッサンスから 30 年台後半のフランスにおけるネグリチュード運動を繋ぐ時期であり、その移行期となる。両運動の類似点及び差異に着目した分析を考えている。また、K. シディベに関しては、先行研究が少ない反面、いわゆるプリミティブなアフリカ彫刻から新たなアフリカ芸術へと移行する時期の芸術家として重要であることは間違いなく、彼の足跡及びアフリカ芸術受容史における位置づけを論じた論文を日本語、外国語問わず発表できるよう努力したい。